

八幡竈門神社の仮面について

小 野 一 郎

*The study of the Mask in
Hachiman Kamado Shrine*

指 導

東京芸術大学 西 田 正 秋
美術学部教授

I 抄 録

八幡竈門神社蔵の木彫仮面について、民俗学的諸問題には触れず、人体美学の立場から計測し、顔面の美的効果の考察への基礎資料としたものである。

II 序 言

八幡竈門神社蔵の木彫仮面で、社伝で『舞楽面』と称されている、顎の長い仮面について、人体美学の立場から、顔面の美的効果を考察し、大分県下の仮面造形の造形的・美術的研究の基礎資料としたものである。

III 観 察

(1) 八幡竈門神社の仮面について

- (a) 所在 大分県別府市内竈
- (b) 所蔵 八幡竈門神社
- (c) 名称 不明、社伝によれば舞楽面
- (d) 作者 不明
- (e) 時代 不明
- (f) 由来 不明
- (g) 彩色 あり、数ヶ所に残存
- (h) 材質 樟材
- (i) 重量 900g
- (j) 寸法 縦径349mm. ×横191mm. ×高さ
(厚み) 7~16mm. (その他、各部分の計測値一覧表参照のこと)

(2) 八幡竈門神社について(縁起書抜萃)

仁徳天皇之時有勅曰、後豊州速見郡竈門莊龜山者、日本武命及神功皇后西征之時、造行宮、徵兵之地、宜崇敬潔祀、於是如降三十三神既国常立尊、天照大御神田心姫命湍津姫命市杵島姫命素盞雄祀天忍穗耳命天穗日命活津彦根命天津彦根命椽樟日命底筒男命中筒男命表筒男命天兒屋根命天太王命武甕槌命建御名方命官贄姫命大山

祇命加茂別雷命大山咋命経津主命天照大御神荒魂丹生都姫命麩坂皇子忍態皇子豊姫命金山彦命 称曰。聖武天皇神龜四年丁卯三月十五日 仲哀天皇 応神天皇靈從=豊前菟狹=降=臨干竈門莊宝城峰、此日於=山麓=見=一白髮老翁、長丈余、髭鬚二尺許、状貌異常自称=大神比義、諸男及土人迎祭=二神干尾興峰、既而降=臨龜山、懸=桜樹枝上、(今時三月十五日称桜会祭蓋始干此、)忽變為=白髮老翁、威靈赫々不=可=仰=諸男命畏伏敬拜、深念默禱者三日、夜時有冥託、於=是始配=竈門宮、祭=于殿中央、嵯峨天皇時藤百合稚、献=九町八反=以為=祀田、淳和天皇天長三年丙午三月十五日迎=神功皇后神靈於菟狹=又配焉、遂称=竈門八幡宮、此時置=社僧、神宮寺末寺長福寺・光明寺・自志寺・他応寺・観音寺・養徳寺皆真言宗也、自=宇佐坊中=来八月十四日放生会三日二夜、此祭七坊共行=之、建久七年丙辰大友左近将監源能直受=封豊後、崇=信此神、祀田尚如=元、正治元年巳未復=祀田九町八反、(此謂=祀田、蓋先=是臺西所=奪、然今不=可=考)大興=東浜行幸儀(東浜今二本松是也)其八幡大神與三及三十三神々與一云、明德二年辛未三月初属=神祇伯白川殿、天正十九年辛卯大友氏没=收祀田、於=是東浜行幸儀寝、元和元年乙卯六坊壞廢、独神宮寺存焉、同元年五月豊前小倉城主細川氏所領之時憂=本社衰頽、復=干舊領往昔、隸=此祠=以奉=祭祀之民戸=不=詳=幾何、相伝以為=竈門=莊=矣、(蓋係=竈門莊=為=九村、竈門野田小坂古市 龜川平田 北鉄輪南鉄輪小浦)而中古以降奉祀者五村、曰内竈門野田古市 龜川平田及鉄輪、大井手川以北附焉、毎年祭祀二月十五日、三月十五日、六月廿九日、十月十五日、十一月初卯日、明治四十年改正二月廿三日祈年祭、四月十五日例祭、七月廿九日夏祭、十一月十五日秋祭、十一月廿六日新嘗祭、十二月十五日冬祭其他一日、十五日、月次祭執行、寛延三年庚午扁額磨滅龜川莊屋高橋奥右衛門神祇伯請于雅富王更時之、古文書古器物遇=大友氏之乱=概焼燼云。

(3) 形体について

一見して異常に面長の仮面である。顔面の左右径：上下径の比が1：1.8強になる。多くの仮面のこのような

比と比較してみたわけではないので断定はできないが、まず面長の部に入るであろう。

作者がどのような美的効果を意図し、このような左右径：上下径の比を割り出したか、同一作者の作品を比較した上での考察ができないのは残念であるが、とりあえずこの仮面についてのみの考察を進めてみたい。正中線を中心として左右の眉・眼・頬・鼻翼・口角等の、位置・形状等がかなり不揃いであるが、これは作者が意図的に Asymmetry の美的効果を出すためにしたものか、或は面打ち技術の拙劣・粗雑さから来たものか、よくわからないが、後者の趣が強いように思われる。もと彩色があったようで、右鼻翼外方の突出した頬の下部、眉の下面、鼻孔等に胡粉地に朱をぬった跡が残っている。彫られた稜は全体に丸味を帯びており、しのぎ（鑄）が立ったという感じはない。左眼内眼角下付近がほぼ三角形に、かなり大きく深く打ち抜かれているが、或は後世欠損したものであろうか。

(4) 額について

舞楽面『散手』・『納曾利』のように、ほぼ正中線上に、頭頂より鼻根部へかけて、高さ巾とも漸減して行くような隆起があり、その左右外方にそれぞれ2箇の小隆起がある。正中の隆起は額面より最高位で20mm。位隆起しており、その左右の隆起はあるかないかの僅かなものである。左の方がややもり上っているが、美的効果を云々という程のものではないであろう。

(5) 眉について

眉頭から眉端へかけて次第に太くなっており、右眉は眉端が下っているが、左眉は右眉よりも上っている。この眉の形態がその下に彫られた眼にも影響して、左眼の方だけの外眼角が斜上方を指す、所謂つり上った目になっている。眉と眼との間の凹みのすき方は雑である。

(6) 眼辺について

左右とも上眼瞼・下眼瞼を欠如して眼球のみが突出しており、右眼の外眼角は鋭角的に尖り、左眼の外眼角は外上方を指している。右眼球孔はほぼ正面を向いているのに対し、左眼球孔は前外下方を見ているようにくられている。両眉の左右非対象性、両眼の形状の相違とも併せて考えると、或は Asymmetry の美的効果を作者が狙ったとも考えられなくもないが、その両眼球のくり方等の粗雑な技巧などから見ると、面打ち技術の拙劣さから来た偶然の事後効果と考えた方が妥当かも知れない。

(7) 頬について

能面中の或種の尉面、または猿飛出におけるように、両鼻翼外方がその凹部より、右頬30mm。左頬38mm。それぞれ前方へ突出している。これを側面から見ると、前額下端の突起・鼻・眉・眼そして頬と、顔面上半部で、ま

るで険しい連山のように集中的に突出しており、これでもか、これでもかと云わんばかりに、力強さを突起物によって表現しようとした作者の意図がわかるような気がする。頬の突出形状も左右でやや不揃いであり、右頬は突出部前面が虫害で破損している。

(8) 鼻について

顔面のほぼ中央にやや左にふれて、側面から見ると所謂天狗の鼻のような鼻が前下方へ突出している。鼻翼間最大巾102mm。仮面仰置の水平面よりの高さ142mm。この鼻は、大きくしかも縦長に開かれた口、きわめて細長い顎と共にこの仮面の重要な point をなしているものと思われる。左鼻翼が丸味をもっているのに反して、右のそれは段丘のように右外方へ張り出した感じである。この左右非対象も A symmetry の美を狙ったというより、前述のようにやはり面打ち技術の幼稚さによるものであろう。もし作者の意図した Asymmetry の美的効果であるとすれば、この仮面を出発点としてその変化・進展をみたいものである。両鼻孔は鼻中隔を打ち抜いて1孔である。のみ跡からみて後年欠けたものでなく、最初から計画的に1つに打ち抜かれたものようである。中に朱の彩色が残っている。

鼻根部に仮面仰置の水平面より118mm。突出している突起物は、鼻根筋 (M. procerus) の作用による鼻根部にできた皺を、この仮面作者の意図したと思われる力量感表現のための、前方への突出的效果に従って、このように突起させたものであろう。鼻尖部はかなり破損している。

(9) 口辺について

頬骨筋 (M. zygomaticus) の作用により、口角がやや外上方に引きあげられており、右口角に比して左口角の方がより外上方を指している。人中は彫刻されておらず、口は開口上下歯露出、下歯に被さるよう厚さ5mm。位の舌が出されているが、舌端が破損していて、その形状は詳かでない。上下歯列は切歯・犬歯・臼歯等の区別はなく、全部切歯状で、上歯6本、下歯9本が彫られている。下歯は破損のため殆ど形状の観察ができないが、上歯の各巾は右より15・10・12・13・14・11mm。上下径は大体17mm。で、歯列の形状は前面から見ると、開口裂の形状を強調するように deform して弧を描いているために、左右外端の両歯は殆ど三角形に近い形になっている。各歯の境はV字形に彫られて区別されており、切歯・犬歯・臼歯の区別がないのは、歯という概念で彫られ、写実的表現をとらなかつたためであろう。上歯の左右外端両歯の上部の上唇に下方に向かって、径・深さ共に5mm。位の穴が彫られており、それに対応する位置のやや外方の下唇にも、同程度の穴がやはり左右1箇所づつ彫

八幡竈門神社の仮面について

られている。何のための穴か不明であるが、或はここに上下各2本ずつの牙（突出犬歯）のようなものがさしこまれていたのかも知れない。

なお人中付近に右より10.5.6mm.間隔に3箇所植毛があり、皮膚に沿って鋭利な刃物様のもので毛は切られているが、白っぽい剛毛である。毛の種類は不明である。

(10) 顎について

細長く突出して感じられる顎は、下唇・頤端間が約55mm. で右を引き、左がやや出たねじれた感じの顎のようであるが、表面の大部分が虫害のためその形状ははっきりしない。下唇下方に約7mm. 間隔に3箇所植毛の穴があり、毛は前述のような状態で切られている。なお頤端破損部中に下方に向かって植毛の穴が5箇所、約5mm.間隔で並んでいる。側面から見ると頤端は仮面仰置の水平面より94mm.の高さがあり、上唇よりもかなり突出し、俗語でいう所謂しゃくれた顎という感じを強く出している。

(11) 裏面について

仮面の厚みは7~16mm. と一定せず、顎は突出したその形状にもよるが殆どくられていない。面打ち技術の巧拙・鑑賞等に重要な役割をもつ裏面の鑿の touch をみると、不揃いですき方も至極粗雑である。額にあたる部分のほぼ正中線上に竈門八幡と判読できる墨書銘が上下にあり、右眼外方に上下の方向に年号らしい墨書銘があるが、肉眼では判読困難である。これが判明すると、或はこの仮面の製作年代・作者等を知る資料になるかも知れない。また墨書銘の磨滅、木肌の光り方等から、この仮面がかつては度々着面使用されていたとも考えられるが、社伝にもなく、最近はずっと社殿奥深く安置されていたので不明である。

(12) 紐孔について

左は頭頂よりほぼ141mm. 右は同じく160mm. の位置に径5mm. 位の粗末な紐孔がある。

(13) 結語

序論で述べたように、郷土の仮面の人体美学的研究の基礎資料として、この仮面をとりあげたわけで、作者・製作年代・由来等全て不明のまま、作柄も舞楽面・能面等に比して及ばないにしても、植毛に4本の牙の怪奇な仮面を復元想像する時、たとえこの仮面が正当な舞楽面などとは、凡そほど遠い造形だとしても、『納曾利』等から、正統には田楽面や能面へと移行・変遷・発展する過程を、或は地方的には土俗面として分散普遍しつつ変形して行く過程を示すべき貴重な遺品となるかも知れない。

例えば本作例では、舞楽面における可動性の釣り眼・釣り顎等が既に1木彫に固着されると共に、その倒立台形（梯形）に近い口裂の受け口式の表現形式の如きも、

既に能面の般若の dessin を示唆するものがある等、この類の土俗面を多く観察・集約・比較分析して検討して行くならば、将来幾多の貴重な条件が潜在しているのではないかと思考される。

なお不明のままに付した民俗学的その他の問題点については諸賢の御教示をお願いしたい。

後記

馴れない仮面研究に懇切な御指導いただいた恩師西田先生をはじめ、心よく御援助くださった宮司矢黒学・氏子総代伊藤竜蔵そして恒松利行の各氏に厚く感謝するものである。

IV 参考文献

西田正秋著 美術解剖学論攷
 同上 顔の形態美
 岡嶋敬治著 岡嶋解剖学
 金子良運著 仮面の美
 志手環編 豊後速見郡史
 小野一郎著 浮嶋八幡の仮面について（大分県立芸術短期大学・研究紀要第5巻）
 同上 浮嶋八幡・八幡石垣社・八幡竈門神社の仮面『あまえご』について
 （同上 研究紀要第6巻）

Tab.I 八幡竈門神社蔵仮面・寸法・計測・一覧表
 小野一郎計測

図版 (Fig.)	付号	仮面部位	mm.	備考
Fig.7	a b	仮面上下径	349	
"	c d	"最大左右径	191	
"	e f	右眼左右径	72	
"	g h	"上下径	42	
"	i j	左眼左右径	67	
"	k l	"上下径	41	
"	m n	右眼球左右径	14	
"	o p	"上下径	12	
"	m' n'	左眼球左右径	12	
"	o' p'	"上下径	10	
"	q r	鼻 巾	102	両鼻翼間最大巾
"	s t	開 口 巾	150	左右口角外端間
"	u v	"	108	左右口角内端間
"	w x	開口上下径	75	開口上唇・下唇間
Fig.8	a b	鼻根部高	126	仮面仰置の水平面よりの高さ
"	c d	前 額 高	118	"
"	e f	眼 球 高	92	"
"	m n	鼻 高	142	"
"	g h	上 唇 高	70	"
"	i j	舌 端 高	75	"
"	k l	頤 端 高	94	"



Fig. 1 八幡竈門神社正面景観



Fig. 2 仮面・前面

八幡竈門神社の仮面について



Fig. 3 仮面・右側面

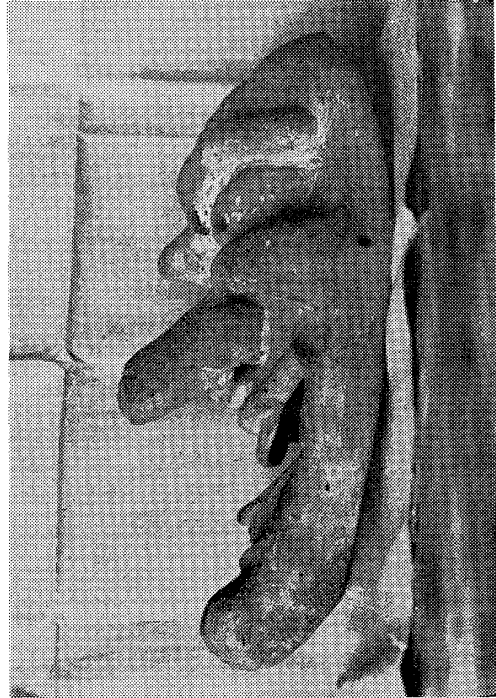


Fig. 4 仮面・左側面



Fig. 5 仮面・左斜側面



Fig. 6 仮面・裏面

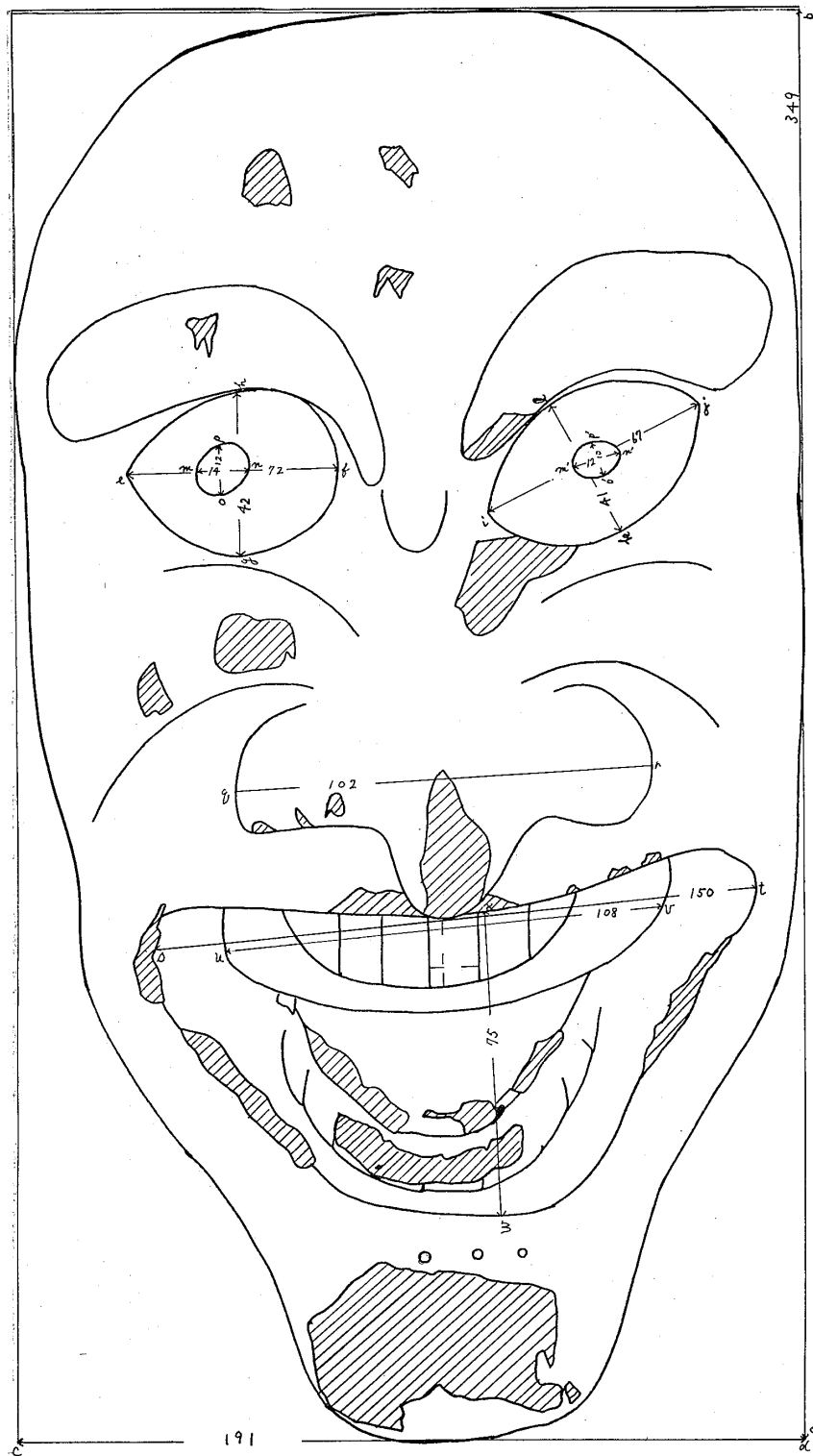
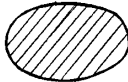


Fig. 7 仮面・前面図 原図実物 $\frac{1}{4}$ ×凸版 $\frac{1}{2}$ 凡例  剥脱部分

小野一郎原図

八幡竈門神社の仮面について

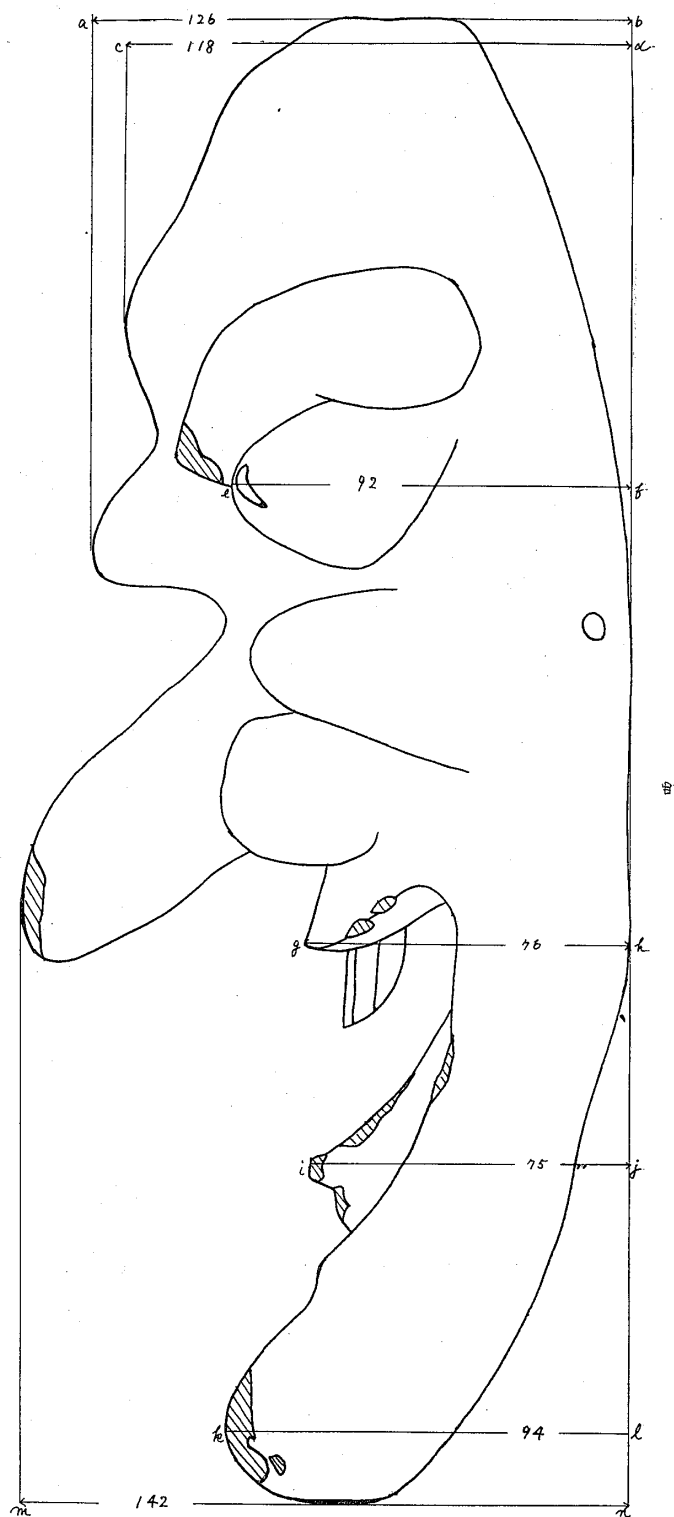


Fig. 8 仮面・左側面図 原図実物 $\frac{1}{4}$ ×凸版 $\frac{1}{2}$

小野一郎原図